

## BOOK REVIEW

## 音楽はなぜ心に響くのか - 音楽音響学と音楽を解き明かす諸科学 -

日本音響学会 編

コロナ社 ISBN 978-4-339-01324-5 2011年11月発行

評者：北原鉄朗（日本大学）

結論から言うと、この本は素晴らしい本である。私は、以前から本書の存在自体は知っていたのだが、恥ずかしながら何となく手に取ることなく、発売されてほぼ1年が経ってしまった。今回、この書評の執筆を依頼されて、初めて本書を手にとったわけだが、なぜもっと早く手に取らなかったのか、何より、なぜこの本を自分の学生に薦めなかったのか、悔やむ限りである。それぐらい良い本である

では、何が素晴らしいのかというと、「音楽」を中心に据えた科学、技術、その両方が関わる様々な分野をまんべんなく扱っている点である。音楽音響、音楽学、音楽社会学、音楽情報処理、音楽に関係した医学や神経科学。これらの様々な分野の専門家が、「音楽はなぜ心に響くのか」という、これまた何とも魅惑的な問いを軸に、各分野の現状と課題をコンパクトに解説している。しかも、専門的な記述が多くなく、分かりやすい。「音楽に関係した何かを研究したい」という漠然とした考えしか持たずに研究室に配属されてきた学部生に、「とりあえず一通り読んでみて」と言って渡せる本として、本書以上にふさわしいものは、おそらくないであろう。

とりあえず、全章ざっくり読ませて、特に興味を持ったトピックを聞いてみて、そこから問題意識を明確化していけばよい。

一つ、注意していただきたいのは、「音楽はなぜ心に響くのか」という問いに対する明確な解答を求めて読むではいけないということである。この問題は、今日であってもオープン・プロブレムであって、まさにこれへの解を追い求めて、様々な研究が行われている。この問いに対する解答を探すのではなく、この問いに向かって研究がどの程度進んでいるのかを知り、自分のバックグラウンドを活かして自分なりの研究をするなら、どんな貢献ができそうかをいろいろ考える。これが、おそらく本書の正しい読み方である。

それにしても、「音楽はなぜ心に響くのか」というタ

イトルは、なぜこうも魅惑的なのか。一般の方が容易に理解でき、それでいて研究者の知的好奇心を極めて的確に表した、このタイトルを考えた編著者らに、私は感服する思いである。私は、音楽情報処理の研究者だが、最初に音楽を題材とした研究に興味を持ったときには、当然こういう思いがあったのだ。音楽は、人間が聴いて感動したり楽しい気分になったりするためのもの（もちろん、そればかりではないが）なのだから、音楽情報処理システムを作る際にも、音楽を聴くと人の心がどう変化するのかを十分に考慮した設計にするべきである。しかし、本当にそれをしようと思ったら、そもそも「心」とは何なのか、「音楽を聴くと心が動く」とはどういう現象なのか、そして、それらをどう計算可能なモデルとして定式化するのか、など様々な問題が発生し、一向に前に進まない。それでは、論文にならない（≒学位が取れない≒職が見つからない）ので、諦めてオーソドックスな情報工学の問題として研究を行ったわけだが、そのような研究態度は、ともすると、単なるデータ処理システムの研究になってしまい、「音楽は人の心を動かすためのものだ」という本質を置き

去りにした研究になりがちである。本書は、それではいけないということを思い出させてくれ、音楽心理学者や神経科学者たちと手を取り合って音楽の本質をとらえた研究をすることの重要性を再認識させてくれる。

日本音響学会音楽音響研究会、情報処理学会音楽情報科学研究会、日本音楽知覚認知学会に行けば、この分野の最新の研究発表を聴くことができる。しかし、研究分野の細分化が止まらない昨今、他分野の研究者が予備知識なしに研究発表を聴きに行っても、なかなか理解しにくいものである。本書を読んで、各分野の研究者がどんな問題意識の下、どんな研究を行っているのかを把握してから発表を聴きにいけば、格段に理解しやすくなるであろう。ぜひ、ご活用いただければ幸いである。

